美豆賀茂集

特116
942

始

特116
942

帝國圖書館

葉茶

楳菴

大正
12. 8. 25
内交

風

庚申夏
八十翁
梅菴題

瑞垣集序

明治四十四年の歌御會始に寒月照梅花と
いふ御題にて詠進し頗選とたまはり御前披
講の光榮に浴せられし京都の大屋久子刀自
六十四歳にてなくなられしよりはや六年
とはなりにけり　此の刀自は安政元甲寅
の年十二月五日北村仁兵衛氏の次女と京都

室町通夷川上る鏡屋町の家に生れ幼きほ
とより風流なる教育を受け維新の際は寺
町今出川に住み鹿児島の藩士大久保一蔵利
通君の旅寓に茶小姓といふものにて仕へられしに
ある日西郷隆盛海江田信義なとの豪傑会
合ありて刀自 何くれと周旋せられけるに誤ち
て席の人に贈られける大花瓶柳と桜とを挿し

ありし花瓶を袂に引かけて覆しければ水は座席
を浸し花も損しぬるにて亂れにしを狼狽のふ
るまひられ速かに舊のさまに挿し直せといふ命あ
り刀自はおそろしとおもはせられしかとも聡き僅
に十四歳なる刀自にはこの大きやかなるいたみ花
をいくつもしのけ
風にかはゆらくになびく青柳のいとは

たりけり かつ聞てあかしと顔赤らめて
言ひそ われらは外見しぬもいとめて
懐に持られしちひさき古今集を常にと
て與へられけりこの人なむ後には此家所長短
甚艶閑貴高特風男とはきこえたる刀自
ら大谷家に嫁しけりしは二十三歳の時なり
しか夫は婿ぬし醫家創業のきりとて

或はその生國佐渡に従ひゆき又は東京にし
そ游びたるとせられしは明治十五年に京都に
定住の身となられ家政に勤学して日も足
らずとふさまり好む所よる好める業とて古今
敷島の道に心をよせ十六年より石井みつ子刀自
我家に請ふてもの学びし税所敦子刀自にも
名つきしおくりものとし つきうけらることとも

りそれ須京都の歌壇を重からしめられし
主要なる宇田淵翁に知られ細辻昌雄須川
信行の宗匠たちも益を請ひ山階宮晃
親王の月次の御歌会へもおのゝはべれりその後
互評会員ともなり明治廿七年よりハ獨力に
て平安神宮に月次献詠を行ひ又京都
婦人慈善会因教会第十字社特志看護婦

會一徳會等に力を盡されし中に就きて
愛國婦人会京都支部の創立にいそしまれ
たりきしより京都婦人歌壇の指導ともなるべき
光風会にも日々牛耳を執られ点者たりし
須川翁なりける後人も多くあるに何のかんる所
ありけむ正にすも其の何をも識らずして
總轄せしのぬしにてありしかとなへしゐられし

かは正岡も刀自か言葉に感し梓にさし給はす
うあひきうつ事に叶ひてほとなく刀自は世をさり去られ
しくおはしぬ　おいまつりたれは刀自は女なから
も俠氣ありし書に画に茶事香曲挿花の
すさひ皆道に晩せられたりき　けれは正岡
か知己なる名字刀自のこの歌集よ　いかはこ
れをうるまつるよの　うきりれまつるあきかくそこ

とおほして　おきそもそたのみてしむへし
大正十二年の春の出し花は付つきし寒月
乃梅花を照をらまひてし

燕雨庵主人　阪　正臣しるす

門人　掛布与月書

[illegible]人の[illegible]を訪
[illegible]秋の月に
[illegible]梅[illegible]

[illegible]之[illegible]

景山

美豆加喜集

大屋久子詠

春 附新年

若水

こゝろねてかゞみてむかふこゝろをも影をうつして老の波よる

新年海

はつ日影青海原は中々にくもとし波ものどけかりけれ

新年梅

たつ春の年のはしめは梅の花咲も匂ふころにそありける

都新年

こゝのへの都の空も女の袖のいろの花やかなる年のはしめに

新年にうちよりて

たつ春の年としらるゝ節にこゝろのちりも払ひけり

霞知春

この頃はまたこゝろよくけはのとかにもかすみわたれる東の空

山霞

くれの色も花も霞にうつりきぬなかの山の春の名のみは

遠山霞

きえ残る雪も今はと見ゆるまて霞わたれるとをき山のは

鶯出谷

鶯はやとにうつる春をしりて谷の戸出る今は雪やきえぬる

早鶯

まつ春のさむき梢にさきたちて聞ものかなり鶯の声

朝鶯

おく霜も春のひかりに長閑なる残雪にあけはしらく霞のなく

餘寒月

大空もかすみの衣かへる春形のこる氷をうつる月さえすむ

梅

はや匂ふ梅のにほひにたかゝらぬ家にもなく鶯に冬梅もしられけれ

古宅梅

春もすてし栖や旧しもあれつゝはしらずよる梅の木のもと

梅薫

けふりともしらぬ国まて梅のさ残嬉しく風の送りくるかし

梅風遠近

をちこちの風のにほひに梅の香のみなれぬ花の下しき うれ

夜里梅

さりけるにはつしく袖も匂ふまて深くる梅のかをりの汁に ふろ

折梅

咲きかりて人はおしむ梅の色のはかりやは今そをしむ つき

うすゝの色よりしも枝残し手折りなかなかまさりて見ゆる人しかれとて

門柳

うちなびく柳のいと我物としる人めかる川ぞひの宿

柳払水

さゞれゐる水のいさゝくはらふ之風ぞゆらぐ青柳のいと

春雨

おほかたのかきとかねとつゞく草のめも色そふ春の雨かな

古寺春雨

きく鐘もこゑさへしめりけむはる雨のふるとしに寺の夜のほに

聞帰雁

ねながらにたちのまゝてかへる月よかすむもとこそかりのゆくらむ

鳴雁契秋

おもひつゝ来る雁かね月ゝまちに秋風ちぎりてかりや行らむ

汐干狩

よる波のくるゝともなきに貝汐の干かたに拾ふたのしさ

桃花

紅のいろわかまきこゝろなつかしきこゝに遊びの姫もかな

初花

わかまつく風ふきもあへぬ枝にさく白しと見ゆる山さくら花

雨後花

雨をおくいとはれのりぬ花の露ちるさへをしきこゝちこそすれ

海邊花

いさり火の影の移ろふしま山にしるしは花のほのかなるらむ

社頭花

萬代も年ふる宮の神そのにさきそふ春は山さくら花

古寺花

やまてらの夕くれの花のちりかひはつきせぬのりのこゝちこそすれ

閑居花

しつのをとよそに遠ける庵にも猶花ゆゑさそりは人そとひくる

花下

まちくらし花をしたひてかくれ行山のかなたもかへるやはらむ

花のもとにて

としことに花はさけとも白雲のかゝる桜の枝みてもあかなき

終日見花

暮れぬとも心うつりて夕月の匂ふもしろく花は見えけれ

里花

咲くは越えつゝ越しえて春来て花より外の里なき哉

贈花

契りおきしことはの花の色もあまた見る庭桜折りてやらばや

花前蹴鞠

何ごとも花の木かげにならふかな風やまかせのさそふ鞠のおとつゞく

花ハ蕨

ちる花はうらみあへず木の下わけのはるゝわらびを折りに折りて帰らむ

花下贈答

こと休の折のみかくも見ゆる人やちなみふ花はうけま

彼岸桜

ことしけふ花はうつろふ手の相風すさくやちらむとすらむ

花ゆゑにまかりし人の遊ぶ餞

ちよろづのこの大御代の春にあひて物いはぬさへ花かな見ん

花ならてにほふをかほりて
こと人もまれなる春の山ふかみいかにかくても咲きにほふらむ

月前落花

久かたの月にまかせしつらぬきの雪とのみ散る夜もすからかな

落花埋庭

さそふらん梢はいかく山かけの庭にもつもる花の白雪

落花入簾

はる風もいたくなやみて花をさへ簾の中にてはらふといはん

やまかせのさそひて小簾の内にこそ緑のことく花のまよふも
よしさらはわれてや春のあさけはを千もの内にもさそひ入るらむ

折くらして

嵐山花の花もさかりにしたることくかゝる庭の紅

頭しけれは

ちりてこそ花のさかりもまた見るれ高き山も峰にかゝりけれ

故郷蛙

かはつなく古里の庭のこかれ水うきわれさてもと蛙なくらむ

春山

はるかすみたなひくけふはおほかたのやまは高ねの雪のきえけりな

春曙

あけはなれさくら麻かすみたちのほりさへつる鳥の春の曙 うれ

春興

郷人山色見かへりくるゝさゝのさされ石にあへは春の仙家かな

夏

首夏風

今よりは花そめ衣ぬきかへてけふ風袖にすゝしかるらん

新樹

ふる雨にうつろひそむる葉のかはりてはや茂さる玉かしはかな

山新樹

たつ人は青葉になりぬ荒山のわか葉もしけくなれるまして

谷新樹

たま川の水はよりもまさりていつる葉はしらこ夜ハまうつくか

谷卯花

ほとゝきすきなくむところ谷の月かけはまかふも嬉したにの卯の花

卯月の末つかた住吉神社にまうでて

まとひまて花もなけれとことの葉のむかしはうけよ住吉の神

初時鳥

おのれ嬉し青葉かくれに一声残もしのふる山ほとゝきす

月前時鳥

ふく声は月の光もゆかしさはこゝちにかすれ山ほとゝきす

暁郭公

たのむ暁ちかくまてのいかにきゝし人のたのしきまゝなかなか ほとゝきす

都時鳥

ありし昔の夜の枕も都にはなかなかしきてぞなくほとゝきす

見る月の山ほとゝきす今宵の旅にゆくこゝろ分にあらぬ

泊郭公

ふくるまて夜とまりの舟のほのめかるゝ一声も物うき

社頭時鳥

まちわひし音のみならす宮居の杉の上まつ都ちかくて鳴ほとゝきす

名所時鳥

たかさこのをのへの松に時鳥かくれぬ声は都ぬきやくき

夕早苗

しつか引水にうつろふ夕月のかけうつしてとる早苗かな

五月雨山路とゝまるよする

長き日も音にふかく晴もあやめ草かゝる軒の山ほとゝきす

梅雨

いとゝしき夜半のかけ成すくらしはやも梅とまつ晴るゝまの空

河梅雨

加茂川の中すの草もなかりけり水かさまさりゆく梅雨のころ

草庵梅雨

しのゝめ残けふもてしほるゝ晴まよりそのまゝさいへ晴るゝ雨の次

草庵夕雨

晴まなき音きくなかめて身のうへにちれるはるゝさ草の庵かな

螢

かゝりけるほたるは光まてさつきのやみもなかきえけり

川螢

大井川たつまのかゝり火はなれて水上とほく舟越になれ

田家螢

うきをそしのふも早苗とりつゝ流にもあきいはぬ螢とふ之

橋螢

夢てらしおもつかす螢の光なきてもとゝに流る宇治の川橋

窓螢

集めぬによりゐましの螢のよしなきの庵の夜のよふく

螢火映水

水はつるゝ松のかけ残しかれやとの夜川越とふ螢なれ

水田夜月

小山田になつまやかゝ夜ふよの月なありしはいはつ之なり

樹下夏月

夜さるらしなみなるゝ月はつけはいつは月なきよりも涼しかりけり

夏草露

おく露にむすふ蛍のひかりさへそひて涼しき庭の夏草

逐日草滋

やりみつのなかれもそことわかぬまて日にそひしける庭の夏草

鵜川

うかひなす波てふけの長良川こよひかきり夜はふかうらみなるらめ

蚊やり火

やまかけの里のくゆる音もなくなかるゝもせぬ蚊やり火のかけ

蓮露似珠

朝毎におきそふ池のはちす葉にむすふ露は玉かとそみる

籬夕顔

破垣にまとひよりたる夕かほの面おもしろき夕くれの花

紫陽花

雨におくつゆしほれたる色のあちさゐは見へたるかな

園苺

うゑおきしかひありもやしなふ紅にちきりにむすふ園のいちこ哉

梔子花

雨そゝく庭のさねはさやゝの見え候てあらはるゝあたりの窓

栗花

むかふこなたにさけるむしろかたの花か見えてすゝきしほるゝ山家

団扇

わすらるゝ身はさらにしもの白露もわかれの扇と共にわすれなむ

野夕立

むかふ野の家路こそちかくもなるらむせき夕立のそら

車上夕立

ぬれしとてはやる車よりも早くすくる夕立の雨

山納涼

よそにみる滝のなかるゝすゝしさはなつきぬ山かけの庵

水樓納涼

池水のかけもまたゝくに夢も涼しきみなとの宿

晩風冷

夕暮の快さの身にしむ夜と思ふかな吹こそ秋か萩のうは風

隣家泉

夜とたつるやましたはさりしくるのとなりの庭のいつみなるらん

午睡

日ならりのたつをもしらて夜ゝまくらつ夜ゆめおもかくおもさめける

金魚買

いろくにも銭あるかきも時なりてすゝしき金魚といはれつる哉

夜風

ふるさまゝなかつる銭よまくへ宵水のよそ風に涼しかりける

夜瀧

おときてもよる青柳の瀧のしらいとたえぬみさゝ風涼しかりけり

田家夏

あさひはてる風に麦銭のり庭まいて籾ほまなき夜風に山田

夜木

そのゝ桑のしほれむとするたつるけ銭しはしは
この花もうなつすのむしてさ

秋

夜残暑

風わたる夜のはつかまゝ庭のおもて夢もむすはす明くるつゆけき

月前萩

いくはら月の光のうつりたる萩の葉の露もさえまさりけり

名所萩花

影うつるきかゝるすゝ原のいとゝ萩か袖錦ほしたる人そたゝる

萩映水

たかつにふ野川の岸の萩の花うつろふかげもうつくしきかな

折萩

折もてる人のたもとを移香の秋はてぬれば後のかたみに

月前薄

かゝやかす尾花か袖にまねかれて山の端いつる秋の夜の月

籬紅葉

柴垣の奈かれに流るゝ紅葉のかけは錦のしほりともしらすほ

栽草花

植くまに野に流るゝ中の上の一鉢に秋の野をみる花のいろいろ

秋花非一

花の流る秋は野のありしけりける草もいろいろにたれかけしは

閑居虫

一つ流る浅しさびしかりける庵をとふものは虫の音はかりなる

庵聞虫

菊くまたいつまでつゝなかのうちたちよる庵の軒はにきゝし虫の声

籬のうちの虫

花のちくさいつれにまさるとも汝こそたれゆく人しらぬあさちふにてふる

松虫

なけきさはあるものをいかに紫の人まつ虫のよるそなくらむ

鹿聲遠

さをしかの聲ハつまとひても雲ゐなるやまハおくしのふかきみねたかく

秋月

かつ清しはれゆくくもの秋のよの月のひかりのかけになかれける

中秋望月

まちわひし月もやとして村雨の露なからさへ袖にやとりぬるかな

行路月

月の名ハわかやとゝしもなけれともなかめて行はまたよは哉

市月

市人のあつまりかへる跡も月清くこそうつるらめ人はたゝぬるまなかりし

田家月

千町田はさかりおさむる月まちてかゝるあさつゆやとのかるゝ

連夜見月

里ふかき夜もすからあれたる宿のみちにたのむ月の影かな

月映水

小河原なかるゝ水のいりかゝてひかりにしるゝ秋のよの月

宮の前まつ

こゝのへの松にやとりし月に千代も老せぬ姿なりけり

月の夜を大宮人のしるしてむさし野を
いまやかてよする

打きつる露をかさしに旅寝してみよしのゝ山の月にちるかな

道路霧

玉ほこの路行人の袖やしほるらむたちこめし霧のうちにも

湖邊霧

かすみの影くかゝて船もはやぬるをまきのこきさす琵琶の湖

名所霧

朝まだきいつる道もわかすして霧のうちゆく浦なみの波と

遠村擣衣

いさゝかのたよりもかれぬ夢に長き里のきぬたもうちなをしける

菊

おく露も千とせ経ぬべし長月の長き夜菊の下水

移日衣薫

もろ人の袖をそてよりうつるなり香のなかくすまて菊をうつす秋

栗

草の上にもはやてうちなかるゝ露にぬれつゝ庭のおちくり

時代祭

秋といふ百とせあまりゆく末は時代も平安のみやこのまつり

秋

野

うれしやの秋の末野を清きかへりの宿に野ゝ月草の露

山家秋

人とはぬ山のおくにも秋はきぬ
月のみこそは友なれと
つくる

冬

古寺落葉

神無月しくれとともに古寺のにはゝ紅葉の色そめにけり

氷

打わたす寒けき夜はの水際の岸のまに池の氷りはとちはてにけり

川千鳥

夜もすから吹雪にさむき川浪にたちゐるちとりなくなり

水鳥

ころもの法のつまれはよろつてたまつたまくかけなけれ

陣中霰

侍のつるきなかしらかけもいくさ人かすやたつしれすまかしろきあられも

大雪

降りつもる上にかさぬる雪の舟よりも道にはつけりける

朝望雪

ちりつもる浅茅かもとにしらむ都さえもて松の梢の雪ふりにける

禁中雪

たかまの神ふれしかせよや治国まもの橘にかかる雪のしらゆふ

聴雪

吹しくと風すさしたつて聞ゆる梢まてかつる音の白雪

雪の降る音するならぬ人もなく

雪中遊興

降る雪のたれかぬれ行まてたかまらしもはこあとなき森の下露

この浜の塩浦まて雪の数さへ浦まさる舟の雪かな

海邊雪

とりかへし拂ひ侍りて夜こ舟の数なくやわたる雪のはるほの

炉邊懐舊

ゆきし歳思ひおこしてうづみ火のはるかにのこし夜はふけつつ

待新年

老となるわかれはまつ新しきとしのはつはるまつもかかりなる

除夜

夫やこの行年のをしきのいくとせねめぐりて年送るさびしさ

冬川

ありつるこの葉のせきて谷川の水の末も冬ごもりする

冬山家

こもる身に椎しばとりもおりつきて冬ごもり行くまな人の里

冬眺望

冬かれにけるたかね山の夕日のひかりはうすき

冬のその

冬そふるこゑきちかくなおもてまつはる猫ぞなく
たのまる

雑

磯松

見わたすに海士もかりきて舟はなくいそべの松の高くもあるかな

名所松

行かよふ千代のやどりと尋ねきて年はふれどもけふの松

猿

夜も猿のなく声すなるやま山は千代守る山のいそぎなるらむ

隣家犬

みちのくとをりの犬のなれくしてそこそこありきつれともとなりまき

猫

ちきりの人はいかにかりし猫の耳ともともよきは静に夢深すなり

暁鶯

千年鶴新代ちふに鶯とりの囀つること声のうつ[illegible]

隣家鶯

鶯の影と聞すいのれる隣よりこゑをきこえけのおくしつる[illegible]

鷺立洲

はくりなき川のきはすいろ鷺はその影もちりもすなしと[illegible]

たか

大鷹は[illegible]の人まつまと見えしも鶴[illegible]もはなと見つる[illegible]

蟻

おもるまて蟻[illegible]いわく山蟻はおのの[illegible]の久々するる[illegible]

塵

[illegible]ぬ方も[illegible]ぬる[illegible]はね つ

除器

こゝはまゐてもつみさるまゐりての元日はおもくみる土さへおもしろく

鼓

よもの海のしつかなる浪はおとさへひゞきたてうつや鼓の音はゆかしき

炭

山の端に毎とせ末の炭やきてくろきも勢ひしろくなりつゝ

煙火

打あぐる人のかけりける流星やほしあまるひかりの音のしるしかゆる

武内大臣

なかれる水の濁る衣ぬれきぬつるゆゑにかゝれしやいつ見ても嬉しき

紫式部

春の夜の上ぼるいまゝはいつはりしき二条の后にゆゑになりにけり

平重盛

曲りける老木のかけの代にありてうつし小松の縁しくもなりけり

源頼政

宇治の橋にうちて芳野しのぶの月にかゝる世の夜半の露

源義経

うつろふも白ふかみるもかはらぬ山の花さくらかな

藤房卿

末遂にかくもと見えすなりぬらん小倉峯のしらくも

立入宗継

よの中の民ぞくるしてたからなる玉ぞうるはし功をぞ思ふ

織田信長

なきあとのよもしらるるに討りある心きよすれは天のみちぞ

光圀公

西山の峯よりもやしほてる月の光る国にかかやきにけり

寄月恋

月みればおもふ人の涙のみうつる月はけさこそ君のおもかけ

寄松恋

我のみそかかる時の色もよそにみた操の松に借れなき

寄舟恋

かくりなきこきいろかは友舟のとまりにさそふうらむつらしも

寄弓恋

一すちに思ひいりなハあつさちるおもしろてもあはれもあやも

宵涼 まく

こゝ汲まかゝやきし波をよもひ哉しすゝま神の光ともに涼

八幡 まく

は山家のとくものこゑつるハうるおのしき鳴きやわたつる

山梔子 のうた、

大正六年夏病おかりし時よめる

咲いそむそのてらの窓よ寝の夜そなつきたハ手へぬ見やしぬ花

月下蝙蝠 のうた

あたやのおる月の光ま、たくのねくよ手するなさく軒のかなはか

赤十字婦人會ちう部福移に

千代のまつむとに里へ山桜うつしうゑける僧の使のり哉

明治卅年八月福知山水害に

うちわたす秋田のいねは水こえてはかなみの上哉舟にのりへ涼

宇田大人へ養老酒をまゐらすとて

よろこびの千代のよはひ哉萬代のかみよにあそる滝の水よか

蕪村性禪への右れ思ひおくる哉おくさらむとて

なきはゝの行へしられぬ魂を嬉しき物にたちやうつらむ

税所敦子刀自ゆかりより世に亡き母刀自の
霊前にとておくられける花瓶に歌そへてたまへり
かへしにはかくなむ
かゝるまた残る言葉の花にあてしき天のかゝみの涙こそも似て

多治子の病おもりし時
そのよるの風もこゝろおのかなりつゝなきてしは花やちるらむ心し

寄燈述懐
やみ路にくらき道ともまよはぬはむねにすむ月の影

述懐
うきことを今はわすれよ忘れぬはなきあとまての物にこそ見よ人

英照皇太后の御葬送を拝みまつりて
御車のあとにはいかにかなしみの涙にみちて見るかなしのうへの

石井光子刀自のみまかりし折
しまりせし友はおくれて残りけるはかなき身こそまよひの道

同し折光子刀自おもひいてゝ

よゝにのこるいさをかなしくひゞくらむきこえさへまさる神はけりな

山階宮晃親王殿下薨去をいたみまつりて

ことしくみの冬まされさる方まし　いまは数ならぬ君なしかなかな

陸軍郷吉氏名誉の戦死を

うちかへしつゝおもひきと清めれと名誉をそ世まてとゝめさりけり

見送劍有感

清きなる世あらしの秋のくもゝ今も光まさりまつりける

そのことはりにまかせて

ともすれはおもふてしれゆかの浜のまかねはたのしつりしく

いくちよのおやの光ある清らにまかりやかしき

税所敦子刀自のみまかりしを

くもゐにもふみのあときてやそへつゝ神のなみくさかな

山本とり子刀自のみまかりしを　きさ

いつこにけ　あはりさく

川の名にあさくもすみもと思ひしを水泡と消えし君そかなしき

橋中喜子の君のみまかりしを

いろ〳〵のことの葉草

咲まて梅の花とうたへる歌はしめ侍らしも世のかゝる哉

光風會々長大谷籌子君の逝去に

哥といふことを

天つ日の光をうしなひてわれやしつむも涙にくるゝ雲のなく

高崎正風大人の一周年に

ありし世をしのひてくるしき年のまつりなる

三輪貞信刀自の逝去せし時に

うたといふことを

有りしよのむかしおもへは菅原のみちこそ我の道

菅公のまつりに

しらぬひのつくしの海のうら波にたちかへる月影

寄鶴祝

雲ゐなる鶴の千代のよろこひも天の数つむ

稲垣敦子刀自の選歌のよろこひに

大庭の林のおちはをたつぬるにいくとせの木の葉

須川家の慶事に極松といふ名を

今よりハときはかきはにしけるらむ名をえてなれる庭の松

阿部文子ぬしの銀婚式に

ならてあまた世の中を白かねのよの婚のうれしさはみてこそしれ

阪正臣大人の六十一の賀に短冊

たしなみて

小筆もて心のまゝにかきつらね千世の千年をいはふなる

戸崎ぬしの六十一に

六十こえて猶ゆく末は千とせへむ千代のよはひのはしめなる

織田宗一郎千代の寿いはひて

君か為よゝのよはひを数ふれはかきりなき千代千代のかす

明治三十一年秋病にて、はやくみまかりしに

やうしなひて後のいはひ次とて

妹か朱たし書きとめるうた

もとめんと妹か思ひ残しおきし桜のよはひはかなかりける

[illegible]

みやしろまへて妙くれに竹取のみまこ

姉そ流るふ風のえせまなれくて根さしかつらかぬまゝのこれ仲

多治子の病おくるゝ大て退院しける説ま

かゝる玉のしもとまと云の歳り千代に栄えよやとの皃松

大正三年十一月五日六十一回の誕辰に

思ふおのれこそしましけるにえらくて六十の坂こえのおするかがみ

頓選の光栄歌えしこゝろ打ち掛れて

この好の庭の光本の梅も花咲きそかゝやき渡る妙なる後の庭

こゝの年に金婚の祝ふ

月日のながれは瀧川のごとく母父子息ま

かりてより早や五十年の春秋をば過

ぎにしかば世にも在りしほとぬめるまゝ

詠み出て其り上る世歌をわすれかねつゝ

とすり世をけもしの世中をしく父も童も

思ひあかるる家の内におはすまゝ君のいふ

うひおくそゆ来さそありへしふさうさひ
光風会の幹事高藤信子一同諒文子
杉村鴎子花籬よしの子のく秀しては道の
友としてゆかり浅からさりし故人の霊
おくさめむてよりにとてやすひるゝ詠草
短冊より集めおひろひつし二千余首の一級
としたまへるなみしおぬ志もうれしく

そのかみも偲たまそいとかうしけあしさふれ
られかう柳營をませむいみてやう臘まきハ
阪西大人はこのうちよりなるへき限を
えらひ抜きたまふこむいとをものなりし
ま大人も公の事繁き中よりつとめて
事よりたおよひて序文をさへものし無之
強ておむとありけれは拙布ら月ぬしの筆を

かくてやつれる集めしものとはなしつ
これも偏に亡き母をおもひいづるよすがの
拙き筆ぐせの跡をのこして世の中の書しい
おほけなくよろこぶらむと思へハかゝる書ハ誤あ
へなきことになむ

大正十一年の冬

大屋多治子しるす

283
26

大正十二年八月二十日印刷
仝　年八月廿五日發行

（非賣品）

編輯兼
發行者　京都市下京區御前通花屋町上ル佛具屋町二百二十三番地
大屋多治子

印刷者　京都市上京區寺町通御池上ル上本能寺前町六番戸
山本彦兵衛

終